



県内では今年
10月3日(土)、
4日(日)開催

がん患者やその家族を支援し、地域
全体でがんに向き合い、がん征圧を目
指して取り組むチャリティイベント「リ
レー・フォー・ライフ」参加時の様子。



自分らしく生きられる社会へ

がんになっても

す。とはいえ、さまざまな心の葛藤から、患者会やサロンに足を運ぶタイミングは人それぞれ。「自分から話したい、話を聞きたいと思った時に来てほしい。それが次の一歩を踏み出せる時」と高橋さんはいいます。その目には、相談に来た方を同じ仲間として温かく迎えてくれる確かな力が満ちています。

つながったネットワーク

て徐々に増えた患者会やがんサロンをつなぐため、10年前に「がん患者会・サロンネットワークみやぎ」が設立されました。今では31のグループが参加し、互いの情報共有や、患者の声を発信するイベントの開催などを行っています。高橋さんは今年4月にこの団体の代表に就任しました。「検診で早期にがんを見つけれたらこんなに元気でいられる。困ったときは相談できる場があるとがん経験者自身が伝えることで、自分ごとと

寄り添い、分かち合う 仲間の輪。



※取材場所：大崎市民病院がんサロン



県政運営の基本指針「新・宮城の将来ビジョン」に基づき、各分野で魅力的な活動を展開する県内の企業や団体などを紹介するコーナーです。今回のテーマは「地域社会づくり」。県内でがんピアサポーター活動に取り組む、がん患者会・サロン ネットワーク みやぎの代表を務める高橋修子さんにお話を伺いました。



感じてもらえる」と語る高橋さん。「病気で悲しい思いをする人を一人でもなくしたい」。それが、このネットワークに関わるみんなの願いです。

がんへの理解を広げたい

ネットワークみやぎでは、各地の医療機関で活躍するがんピアサポーターを育成するため、県や関係機関と一体となって、養成研修に取り組んでいます。また、これからは新たに「がん教育」との連携も模索しています。医師や看護師だけでなく、がん経験者が自身の体験を子どもたちに伝えることで、子どもたちががんを身近に感じ、自分や家族の健康を守りたいという意識を高めてほしいと考えているからです。高橋さんは、「子どもたちを通して、検診の重要性やがんに対する正しい理解が家族へ伝わり、そして社会へ浸透してほしい」と願っています。がんや診断されたことを隠すことなく働くことができ、身近な場所でもサポートを受けられ、がんになっても自分らしく生きることができる社会になってほしい——そんな未来を目指して、ネットワークの輪は今日も広がっています。

自分だけじゃなかった

柔らかな光に包まれた病院の一室。和やかに歓談する輪の中に、「がん患者会・サロン ネットワークみやぎ」代表の高橋さんの姿がありました。平成13年に検診がきっかけでがんの告知を受け、がん患者になったことで「話せる人がいない、相談できる場所がない、情報がない」と気づき、辛い時間を経験したという高橋さん。転機となったのは、がん患者の全国組織集会への参加でした。明るく会話を交わす参加者の姿に感銘を受け、相談した主治医からも背中を押されたことから、自ら患者会をつくろうと決意。病院やがん相談員の協力を得て、平成16年に患者会を立ち上げました。以来、患者同士の交流や学びの場として20年以上活動を続けています。

仲間だからできること

高橋さんは患者会の活動を続けながら、「がんピアサポーター」として病院内のがんサロンの運営にも携わっています。がんピアサポーターとは、がん経験者や家族が、同じ立場にある患者や家族を仲間（ピア）として支えるサポーターのことです。サロンでは医療スタッフと連携し、がん患者の方が病気と付き合いながら自分らしい生活を過ごせるよう相談に乗っています。「同じ病気だった」と言われただけで救われた思いがしたという体験から、同じ経験を持つ仲間だからこそ、より気持ちを持共有でき、安心して話せる身近な存在になれると考えています。インターネットの情報を得て不安を抱えた方も、直接会って話しただけで、気持ちが変わる方がほとんどだそうです。



がん患者会・サロン ネットワークみやぎの代表・高橋修子さん。自身のがん経験から、患者や家族が集える場として、大崎市民病院の協力のもと乳がん患者会「りんりんの会」を設立。がんピアサポーターの先駆者で、全国各地で研修を受けながらスキルを高め、県内の患者会・サロン活動をけん引する存在に。活動に注力するため、元々続いていた保育士を早期退職し、現在は同院のがんサロンに勤務。



がん患者会・サロン ネットワークみやぎ



事務局：宮城県がん総合支援センター

ホームページ /



代表の高橋さんと事務局相談員の皆さん。ロゴマークは、それぞれの疾患のリボンカラーをイメージした色とりどりの花が、肩を組むように輪になっています。患者さん、家族、活動に賛同する方が、一つの輪になって活動を盛り上げていきたいという願いが込められています。



治療の副作用で手がしびれる方でも、ふたの開け閉めが楽になるよう手作りされた「キャップ開けシート」。患者さんの日常生活に役立つさまざまなサポートに取り組んでいます。